クリムゾンＬＥＤ

葛之葉

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
クリムゾンＬＥＤ

【Ｎコード】
Ｎ６８０７Ｍ

【作者名】
葛之葉

【あらすじ】
緋色の瞳に願いを込める事は、絶望を纏う対価に求めたるモノを与えられる。
絶望は底が無く、対価としつ与えられたモノは薄く脆い。
それでも人は求める。

緋色の瞳

緋色の力は渇望

緋色の願いは絶望

世の中に都合の良い展開など存在しない

只、確率が世界の全てである

緋色の混沌は確率に人の業を併せて良とする

それは、業深き者への希望か、あるいは絶望か

◇◆◆◇

「嫌だ…死にたくない…嫌だ…」

男は絶望的な状況で呟き続けた。

マフィアの用心棒をしていたこの男は、ギャンブルにより個人レベルでは到底返しきれない負債を抱えていた。

追い詰められた男は、つい手が出てしまった。

己が所属するマフィアの金に。勿論、待っていた末路は他の者達への見せしめとしての拷問による地獄、そして組織の力を示すための路上での拷問による死だった。

「あいつ等…殺してやるっ、死にたくない、死にたくないよぅ…」

「力が欲しいか？」

巨大な緋色の瞳が語りかける。

「死にたくない死にたくない死にたくない死にたくない…」

男は気付かない。

「力が欲しいか？」

巨大な瞳は繰り返す

「死にたくない死にたくない死にたくない死にたくない…死にたくない殺してやる必ず死にたくない死にたくない死にたくない…」

男の忌まわの言葉に別の言葉が入った。

「契約は成れり」

夢

夢の中で皆死んだ。

夢の中で力を手に入れたら皆死んだ。

夢の中で死んだのに本当に皆が死んだ。

夢の中で死んだのに本当に存在すら死んだ。

死んだと言う表現すら死んだ。

何故だか私は絶望した。

夢の中で只絶望した。

◇◆◆◇

「この町…なんで誰もいないのさ」

金色の髪を靡かせ、街角の隅で客取りをしているかの様な外見の女が呟いた。

町の広場の中央にある噴水に腰掛け、気怠げに辺りを見回す女は、ともすれば昼間から客取りをしているだけにも見えた。

「アイツの仕事にろくなの無いわね」

金色の髪の女は、昔からの知り合いである現フューゾル市の市長となった黒髪の女を思い浮かべ、陰鬱な気分になった。ふと、違和感

を感じ自分の右手を見てみた、手首から先が消え失せていた。

「…は？」

痛みは無い。

そのせいか、右手が消失しているにも係わらず何処か実感が湧いて来ない。

金色の髪の女は周囲を見渡した。

「…クリムゾン・フィールドか…」

周りの景色は変わりが無いが、空気が違った。

例えるならば、見知らぬ土地にたった一人で立っている、あの形容しがたい感覚が今のこの空間にあった。

「貴女は生きてるの？」

いきなり少女が現れた。

少女…と言うと語弊があるかも知れないが、年の頃なら１５・６歳の黒髪を肩口まで伸ばした、少しボーイッシュな感じの子だ。

「…アンタ誰？町の人？」

金色の髪の女は黒髪の少女に尋ねた。

「はい…私はこの町の人間です…他の人は何処に行ったか解りません…」

金色の髪の女は、先程感じたクリムゾン・フィールドはこの少女の発生させたモノだと感じた。

尤も、他にこのフィールドを発生させる存在が居ないのだから当たり前の話なのだが。

「…私はジュディ、アンタの名前は？」
ジュディと名乗った金色の髪の女は、黒髪の少女に尋ねた。

「私は…ティナ、ティナ＝キィです」
ティナと名乗った黒髪の少女はジュディに答えた。

「そう、ティナね…ティナ、単刀直入に聞くけどアンタ、クリムゾンに会ったでしょ？」
ジュディがティナに聞いた。

「クリ…ムゾン？」
ティナには理解出来て居なかった。

ジュディは違和感を覚えた。
「…もしかして後覚醒者…ティナ、この町がこんなになった理由は解る？」

ティナは少し考えるそぶりをして答えた。
「多分、私が…やりました…」

ジュディは確信した、後覚醒者だと。
「ティナ、アンタは契約する時に…ってアンタには良く理解出来てないだろうけど…」
ジュディは説明が苦手だった。

「つまりアンタは、この世界で禁忌な力…ごく一部しか知らない力

をアンタの意思を無視されて契約されちゃったって訳」

「禁忌…契約？」

やはりティナには理解出来ていない。

ジュディは構わず続けた。

「アンタ、私と来なさい」

ティナには頼る存在は全く無く、この出会いによりこれからの道標が決まった。

しかしそれは、契約に縛られ決められた道に過ぎない一本道なのかも知れないのだった。

小箱の街

フューゾルと言う街は、元々は大陸の西に位置する小さな国であった。

大陸のやや東寄りに位置するロード＝グレイ帝国の大陸統一戦争の激化により、大陸の中央、つまり三分の一を支配下に置く現状により、東部の小国家は皆連合を結び帝国に抗っていた。

フューゾルの位置する西側の国々は、中央南を覆うエルフ族の支配する大樹海と、中央北に連なるドワーフ族が支配するカトラーン山脈郡が壁となり、本格的な戦争には突入していなかった。

帝国が海軍を本格的に組織するまでは。

海軍の進行により、西側最大の宗教国家アルシーナ神聖国は周囲の国々との結束を計った。

帝国に刃向かう力など持たない小国家は強国アルシーナに庇護を求め、アルシーナは事実上西側の殆どの国々を吸収した。

無論、フューゾルもその一つである。

こうしてフューゾルは一国家から一都市へと姿を変えた。

◇◆◆◇

ジュディはティナを連れてフューゾルに戻ってきた。

元々、今回の依頼はあの町の生き残りの保護だ。
あの町の現状から、あれ以上捜索する意味も無いだろうと早々に切り上げての事だった。

「…凄い…こんなに大きな街、初めて見ました…」
ティナは圧倒されていた。

曲がりなりにも統一前は国であったのだから巨大で当然なのだが、小さな町が世界の全てであったティナには、まるでお話の中の世界に見えるのだろう。

「アハハっ、フューゾルなんてアルシーナに比べれば小さい方だよティナちゃん」
いつの間にかティナをちゃん付けで呼ぶ様になったジュディが答えた。

「でも、私はジュディさんと違ってあの町から出た事なかったので、やっぱりビックリですよ」
こちらはジュディをさん付けにする様になり、落ち着きなくキョロキョロと辺りを見渡している。

そんなティナに、ジュディは苦笑するしかなかった。

◇◆◆◇

「それで、生き残りはその子だけなの、ジュディ？」

フューゾル市庁、市長室の席に座る艶やかな黒髪を伸ばしたモデル並の身長と顔の現市長、マリー＝ゴールドは暇そうにペンを廻しながらジュディに聞いた。

「んっ…ああ、他には死体すら無かったよ」
何故か出された青汁を美味しそうに飲んでいたジュディがさして興味もなさそうに答えた。
「あっそ…ねぇ、ティナちゃん？」
興味が全く無かったのか、話題がいきなりティナへと振られた。
「うっ、あっ、えと、はいっ何ですかっ！？」
初めて飲んだ青汁の余りのマズさにどうすれば良いか悩んでいたティナは、いきなりの事に混乱した。
「ティナちゃんに聞きたい事があるの」
マリーは何故か目を蕩けさせて聞いてきた。
ティナは、生涯で初めての悪寒に襲われた。
「あー、マリーさ、用事があったんだったよ、仕事代は何時もの口座なっ」
ジュディがそう早口にまくし立て、ティナの腕を掴んで足早に部屋を出た。
「チッ…」
誰も居なくなった部屋にマリーの舌打ちが響いた。

小箱の街～二～

市庁から出たジュディは開口一番にティナに言った。

「いい、ティナちゃん。マリーは少女が好きなの…しかも、ティナちゃんみたいな少年の様な部分がある子は危険よ」

ティナにはよく理解出来ない部分があったが、自分が感じた悪寒が間違えていなかった事は理解出来た。

「…恐ろしい人なんですね」

ティナはマリーの目を思い出し、身を震わせた。

「色々な意味で恐ろしい奴よ、あの女は…色々な意味で…」

大事な部分だったらしく、ジュディは二回続けて強調した。

二人揃って恐怖を感じる時間を打破する為にティナが別の話題を振った。

「そういえば…ジュディさん、右手が生えましたけど…特異体質ですか？」

その言葉を聞いて、ジュディはティナにクリムゾンの説明をしていなかった事を思い出した。

「ん～、特異体質ってか…そだね、場所変えて話そっか」

ジュディとしては、あまり他の人間が沢山居る場所では話しずらかった。

◇◆◆◇

ジュディが居候している場所、皇龍亭はフューゾルではそこそこ人気の喫茶店であった。

ランチメニューの素晴らしさは勿論だが、何よりもウェイトレスの服装に秘密があった。

ティナは呟く。

「…メイドさん…てか…胸元開きすぎ…スカートも…脚の白いヤツ、あれってガーターベルトってヤツですよね…」

マニアックなのだ。

しかも間違った方向に。

「どうしたジュディ、家賃が払えないから新しいメイドでも連れて来たのかい？」

急に背後から声を掛けられた二人が振り向くと、そこには一歩間違えたならば女王様と呼ばれる場所に相応しい程の衣装に身を包んだ赤髪の美しい女性が立っていた。

「そんなんじゃ無いですよ、明心（メイシン）さん、この子は私の客です」

ジュディには珍しく、敬語になっていない敬語で話した。

「客っ？アンタにかい？珍しいねぇ…」

明心はそう言うと懐からキセルを取りだし店の据え置きライターで火を付けた。

「…んで、アンタの名前は？」

煙りを気怠げに吐き出しながらティナに向かい声を掛けた。

「あっ…はいっ、ティナですっ」咄嗟に反応して返事をした。
「ふーん…ティナ、アンタ…なかなか良いねぇ…」
マリーのソレとは違う、何か纏わり付く視線を受けてティナはたじろいだ。
「あー明心さんさぁ、悪いんだけど私、これからティナちゃんに話があるんですよね、部屋戻るからティナちゃんは諦めて下さいよ」
何を諦めるのかは解らないが、明心はしきりに「惜しいねぇ」や「勿体ないねぇ」を連発しながら店の厨房へと消えていった。
「ジュディさん…一体…」
開口一番ティナが口を開くが、「早く上がるよティナちゃん」ジュディは疲れ果てた顔でティナを部屋に促した。

◇◆◆◇

「ヒャッ…ヒャッハハハッ、弱いっ弱いぜぇぇぇっ！」
男は狂っていた。
マフィアの根城であったこの場所は、既に廃墟の様に壊されていた。
「お前等は、警官を、辞めて、ファミリーの、一員になった、俺を、殺しやがったっ！」
男は、既に息絶えた骸を蹴り飛ばし、踏み付け、殴り続けた。
骸は眼球が飛び出し、脳が溢れ、内臓を飛び散らせた。

それでも男の凶行は止まらない。

「ハッハーっ！凄ぇ、凄ぇぜこの力はよっ！」

男は力を得た。

そして、差し出したモノはただでさえ少なかった人としての良心であった。

◇◆◆◇

「…つまり、私はそのクリムゾンって【人】に力を貰って何かを交換に渡したんですね」

微妙に間違えている気がしたが、ティナの解釈が概ねあっていたのでジュディは良しとした。

「それで、その力が発動した時に出来るフィールドが不確定だったから、捻れたフィールドと現実の結合部分にあった右手だけ空間の狭間に持って行かれた…で良いんでしょうか？」

ティナは小首を傾げて聞いた。

「ん～、説明が面倒臭いからアレなんだけど…概ね間違えてないから大丈夫かな」

大丈夫でない返事で返したジュディは青汁を啜った。

「それで、フィールドが消えたから右手が戻った…ジュディさん、マズくありませんかソレ」

ティナはジュディの持つ青汁を見ながらいった。

「んっ？何がマズいの？右手が戻ったんだからそれでいいんじゃない？」

戻った右手で青汁入りのグラスを振って見せた。

「いや…その青汁ってのが美味しくないって…」

微妙な勘違いをされたティナは言い直した。

「あぁ、青汁の事ねっ…美味しいじゃない、青汁」

ジュディは真顔で言った。

ティナは、ジュディの事が別世界の生物の様な気になったが、何とか「そうですね」と返せた。

αでありΩ

◇◆◆◇

「始まりは退屈から、終わりは退屈から」

年の頃なら１３～４歳の、艶やかな金色の髪を風に靡かせた少年は、崖の上から眼下に広がる光景を眺めながら呟いた。

◇◆◆◇

「ワシは…何をしたんじゃ…何をっ！何をしたんじゃっ！」

崖の下では、三体の死体と一人の銀色掛かった白髪を頭の後頭部上方で束ねた、和服の老人が居た。

老人は緋色に輝く瞳を大きく開きながら絶望していた。

「何故娘をっ義息子をっ子供を殺したのじゃっ！」

涙を流しながら狂った様に叫び続ける老人の足元には、四肢を失い顔面を陥没させて横たわる娘夫婦の死体がもの言わず転がるだけであった。

「ワシは…ワシは…」

老人が己が所業に打ちひしがれている時、背後から声がした。

「始まりは退屈から、終わりは退屈から」

声に反応する気力は残っていたのか、老人は力なく振り返る。

「初めまして周防さん、僕はαでありΩです」

少年の言葉に老人は、何故自分の名前を知っているかよりも、その後の言葉の意味を把握出来ずにいた。

「今はαでもΩでもありません、なのでシグマと呼んで下さいね」

風が止んだ。

そして再び風が吹きはじめた時、何かの歯車が確かに動き出した。

穏やかに、それでいて何者にも止める術のない絶望への歯車が。

◇◆◆◇

フューゾル市長から仕事を請け負うという変わった職業のジュディであったが、ティナをこれからの相棒として仕事に携わる事に決めた報告を怠る訳にいかず、ティナをマリーに引き合わせる危険を承知で市庁に赴いていた。

「まぁ良いわ、報酬も二人分はらいましょ…但し、前金は無しにさせて貰うわ」
マリーの申し出はこうであった。

破格の報酬が二人分になるのだ、完全成功報酬も当たり前なのだが、
「ふざけんなっ！前金無しだって！？これからの家賃の支払いがマズいだろっ、【あの】明心さんだぞっ！」
ジュディが噛み付いた。

「嫌ならどうするの？他に何か代案があるならそれでも良いわよ」
マリーはティナに笑顔を向けながらジュディに聞き返した。

「…それで良いです…」
ジュディは瞬時に諦めた。

◇◆◆◇

「周防さん、今回はあの町で発生します」
金色の髪の少年シグマは周防に話しかけた。

「…シグマ殿、何故何時も解るのじゃ」
周防は何故かこの少年に付き従い、何故かこの少年の発生と言うモノに付き合っていた。

「何故…アハっ、周防さん、僕はαでΩだと話しましたよ？だからシグマだって事もね」

シグマの言葉に周防は理解をする事が出来ずにいた。

「理解出来なくていいんですよ、納得してくれれば良いだけです」

シグマにとって周囲の理解など必要無かった。
ただ、自分に対して納得するだけで構わないと。

◇◆◆◇

ティナとジュディはある町に向かっていた。

マリーに二人で依頼を受ける為の確約を決めた後、直ぐに依頼があったからだ。

「ジュディさん…この依頼ですけど…」
ティナが怪訝な表情で聞いてきた。

「あぁ…間違えなく【覚醒者】が絡んでるね」
ジュディは確信していた。

【短期間での無差別殺戮】、これを調べる事が今回の依頼だが、殺戮の間から間の間隔があまりにも早すぎるのだ。

集団の可能性も否定は出来ないが、殺戮方法が常軌を逸していた。

「一般の人間には無理…よね」

ジュディはティナを横目に呟いた。

望む者

◇◆◆◇

【力が漲る。
俺は無敵だ。
塵芥共を壊し、砕き、刻み、犯す。
最高だっ！
塵芥共は俺の玩具だっ！
存在としての高尚さが違うんだよっ！】

「そうだね、殺された人達は人間だけど…君は化け物だもんね」

【あっ？
なんで言葉が聞こえる？
ここにはもう誰も居ねぇ筈だろ？】

「そうだね、ここにはもう【人間】は居ないね」

後ろを振り向くと、子供と初老の男が居た。

【あっ？人間なら俺とお前等が…】

「君も僕達も人間じゃ無いよ」

少年は相手の言葉を遮り更に続けた。

「特に君は」

【はっ？】

シグマは言う。

「だって君、化け物だよ？自分の姿に気付いて無いの？」

化け物と指摘され、自分の姿を確認してみた。

【あ…う…あぁあっ！？何だよっ何だよコレはぁっ！？】

そこには甲殻に覆われ、手が８本、足が無数の触手と言う人外が存在した。

「害虫は…駆除しなきゃね、アハハっ」

シグマは怪しく笑う。

周防は哀しそうに刀を抜いた。

◇◆◆◇

「…死んでるねーコレ」

開口一番ジュディは言った。

死んでると言うより、壊されていると言う表現が合いそうな成れの果てであった。

ティナは、流石に吐き気を堪え切れずに建物の陰に隠れて吐いていた。

「…暴走の果てに人間辞めたか…でも、覚醒者の…しかも暴走した奴を誰がここまで…」
「僕達ですよ、ジュディさん」
目の前の覚醒者の残骸の先、先程までは誰も居なかった筈の場所に二人の【人間】が立っていた。
「…誰よアンタ…」
素性の知れぬ相手にいきなり名前を呼ばれ、ジュディは警戒した。
「僕はシグマです、こっちは周防さんです」
そんな警戒を気にせずシグマは言った。
「アンタ等さぁ…全部が唐突過ぎて説明になってないでしょ、意味解んないんだけど…」
ジュディは相手に見えない角度から後ろ手に愛用の鞭を掴んだ。
「理解は必要ありません、ただ納得してくれれば良いんですよ、【覚醒者】のジュディさんに…ティナさん?」
いつの間にかシグマ達の後ろに回り込み、茶色から緋色の瞳へと色を変えたティナに向かいシグマが言った。
（コイツ…何だ?）
ジュディは今までに無い、真っ暗闇の底知れぬ恐怖に包まれた。
「理解はいらない…ですが、説明が欲しければしますよ、アハッ」

シグマは屈託無く笑った。

クリムゾン・フィールド

「ティナちゃんっ！集中してっ！」

ジュディの碧い瞳が緋色に変わる。
それに呼応するかの様にティナと周防の瞳が完全な緋色に変わった。
ジュディの瞳が完全な緋色に変わった瞬間、周囲の空気が変わった。
三人のクリムゾン・フィールドが混じり合い結合した、何とも形容し難い空気である。

「…なんでアンタがこのフィールドに入れんのよ…」
ジュディは警戒しながらも、シグマに尋ねた。

「僕は【純血種】だからですよ、アハハっ」
何を当たり前の事をとでも言う様にシグマは言った。

「純血…種？」
ティナは呟きジュディを見たが、ジュディにも解らない様で眉をしかめていた。

「周防さん、彼女等は敵ではありませんから手加減を」
シグマの言葉にジュディはキレた。

「手加減だぁ！？ふざけた事抜かしてんじゃねぇよ餓鬼がっ！」
ジュディの瞳が全て緋色に変わった。

「死ねや餓鬼がっ！」

言葉に乗せた覇気と共に、ジュディの周囲に無数の機械の箱達が鎖に繋がれて空を浮かびながら現れた。
機械と言っても、ソレは様々な殺戮、拷問道具に彩られた異様なモノ達である。

「ほう…なかなか…」
周防はジュディの周囲の箱達を見て呟いた。

「ではワシも…」
周防は腰を落とし、半身に構えると裂帛の気合いと共に叫んだ。

「壱の太刀！斬！」叫びをあげた瞬間、鞘から音すらせずに刀身が抜かれた。

居合の軌跡に無数の緋色が絡み付き、そこから網目の軌跡へと変化させた。

「うぉ！？守りなリッパー共！」
ジュディの命令により、リッパーと呼ばれた箱達は凄まじい速さで回転を始めた。

あまりの速さにより、音が衝撃へと変わった。
その衝撃により、網目の軌跡は対消滅した。

「はぁ…はぁ…なんて出鱈目な攻撃方法だい、ジジィっ！？」
ジュディは顔色を変えながら叫んだ。

「口が悪いのぅ…御主、死んだ娘にそっくりじゃわい…お灸を据え

ねばなぁ…」どこか嬉しそうにそう言うと、周防は踏み出した。
瞬間、周防の足元で爆発が起こったかの様な音と共に姿が消えた。

「はっ？」
ジュディは消えた周防に虚をつかれた。
その時、目の前に周防が現れた。

「御主、なかなかの兵(つわもの)じゃが…まだまだ経験が足りんのぅ…」
その言葉と同時に柄を鳩尾に入れられた。

「ぐっ…ティナちゃ…ん逃げ…」
そのままジュディは気を失った。

「さて…と、どうしますか、ティナさん？」
自分の能力を把握出来ていないティナに、ジュディを苦もなく気絶させた周防を倒す術は無かった。

「私達の負けです…」
ティナはシグマに言った。

「負けも何も、僕達は戦う気なんてなかったんですから、ねぇ周防さん？」

周防も苦笑いしながら頷いた。

瞬間、クリムゾン・フィールドが四散した。

「では、何処か落ち着ける場所で説明しましょう」
シグマがそう言うと周防は気絶したジュディを担いだ。

「皇龍亭でいいですよ」

シグマは皇龍亭を指定した。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n6807m/

クリムゾンＬＥＤ

2011年1月27日05時07分発行